

[研究書紹介]

Patsy S. Fowler and Alan Jackson, eds.,
Launching Fanny Hill: Essays on the Novel and Its Influences,
AMS Press, 2003, xix + 364pp.

吉田 直希

John Cleland の *Fanny Hill* (1749) は 18 世紀ポルノグラフィの代表作とされながらも、これまでまとまった論文集が出版されることはなかった。しかし、近年のカルチュラル・スタディーズ、フェミニズム、セクシュアリティ研究の隆盛に伴い、1999 年、アメリカ 18 世紀学会でのパネルセッションをきっかけに 14 人の若手研究者たちが集まり、本書が生み出されることとなった。

本書は便宜上、三部構成の体裁を取っているが、個々の論文に強い結びつきはなく、相反する諸見解を見出すこともしばしばで、当然のことながら、一つのまとまった結論を得ることはない。同一の対象を分析しながらも、そこには自ずと幅や奥行きに広がりが生じているのを再確認するとき、私たちは原作に登場する様々な性の表象の微妙な差異にもう一度目を向ける必要性を実感するだろう。さらに、本書が対象とする読者には、18 世紀研究者のみならず、学部学生や一般読者も含まれており、18 世紀ポルノグラフィ研究の入門書としても活用できる一冊である。

第一部 (Understanding the Text) で、John C. Beynon は、“account” という語の使用に着目し、性的／経済的側面から女性の社会的進出について論じることで、これまでの男性同性愛中心の議論を修正し、レズビアニズムの表象の可能性と限界を作品の内に読み込もうとしている。第二部 (Historical and Cultural Perspectives) では、作中の異常性愛者 Barville とメソディスト派の始

祖 John Wesley の対比から、宗教とセクシュアリティの関係性を考察している Misty G. Anderson の議論が興味深い。当時のメソディズムの光と影を SM の両義性と結びつける解釈は、Henry Fielding など同時代の作家とメソディズムの関連を考える際にも新たな視座となるであろう。また第三部 (Contemporary Manifestations) には *Fanny Hill* の映画と原作の比較や Mills College (女子大!) でこの作品を授業の題材に取り上げた時の学生の反応も収められている。Kirsten T. Saxton の “Risking Fanny: Teaching *Memoirs of a Woman of Pleasure*” は、授業でのメーリングリストに載ったメッセージを引用し、さらに実際に講義で使用する際の注意点を列挙しており、私たちがこの作品をテキストにする際に大いに (?) 参考となるであろう。

Oxford 版の *Fanny Hill* を編集した Peter Sabor が本書の序を執筆しているが、彼の論文 “From Sexual Liberation to Gender Trouble” (2000) と本書を並べて読むと、性の解放から攪乱的な性への移行がより身近に感じられるだろう。本書と同時期に *Eighteenth-Century British Erotica* (2002) が刊行されていることから、ポルノグラフィの誕生をめぐる議論は始まったばかりである。